

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

「「もの」の人類学的研究(2) (人間／非人間のダイナミクス)」 (平成27年度第3回研究会)

日時：平成27年11月8日 (日曜日) 午後13時より19時

場所：AA 研306室等

### 報告者とタイトル

奥野克巳 (立教大学) 「人は鳥を食べ、鳥は獣を助ける：ボルネオ島・プナンのパースペクティヴィズムの一断面」

伊藤詞子 (京都大学) 「チンパンジーにおける人間／非人間のダイナミクス」

大村敬一 (大阪大学) 「オントロジー (存在論) からコスメティクス (化粧術) へ：在来知と近代科学を対称的に扱うために」

岩谷彩子 (京都大学) 「生産的な廃棄物—インドの露天商がつなぐ人、もの、その境界」

### 報告の概要

まず最初の報告者の奥野は、「人は鳥を食べ、鳥は獣を助ける：ボルネオ島・プナンのパースペクティヴィズムの一断面」と題して、マレーシア・サラワク州のブラガの森に住む狩猟民・プナンが築き上げてきた、人間と鳥によって織りなされる豊かな世界を民族誌的に描きだした。野生の鳥はここでは、他の動物と同様に、食べられる存在である。プナンは、狩猟した鳥を食べ、鳥の囀りを聞きなし、狩られた鳥に忌み名を付け、鳥の世界を鳥の側から見ることを試みた。

現地では和訳すれば、「リーフモンキー鳥」と名づけられた鳥がいる。ハイガシラアゴカラムリヒヨドリである。頭部は灰色、腹面が黄色い。その鳥が飛んでいるのに出くわすと、そのかたわらには、リーフモンキーがいると言われる。そのために、リーフモンキー鳥という名前が付けられていると考えられるかもしれないが、プナンは、そうではないと言う。リーフモンキー鳥という名は、それが、リーフモンキーを助けるために、人間の近くを飛ぶことから来ているのだと言う。リーフモンキーが、リーフモンキー鳥の囀りを聞いた

とする。リーフモンキーにとって、リーフモンキー鳥は、人間がかたわらにいることを知らせることを指差する。リーフモンキーは、リーフモンキー鳥の鳴き声を聞くと、捕食者である人間がいることに気づいて、その場から、人間とは反対方向に飛び去る。そのことによって、リーフモンキー鳥は、リーフモンキーの生命を助けることになる。テナガザル鳥（カオジロヒヨドリ）も同じように、人間の近くを飛んで、テナガザルに捕食者である人間がいることを知らせて、生命を助ける。

こうしたヒヨドリをめぐるプナンの語りは、エドゥアルド・コーンの「実用的」パースペクティヴィズムの議論（『森は考える：人間なるものを越えた人類学』所収）を手がかりとしながら考えてみることができる。不可知主義を超えて、人間の間主観性も種=横断的な意思疎通も、質的には同じであるとすれば、私たちは動物であることがいかなることであるのかを知ることができる。案山子は、動物であることがいかなることであることなのかを私たちが知る一つの例証である。エクアドルのルナ社会には、パースペクティヴ的な神話や振る舞いがたくさんある。草ぶきの穴を屋根に登って修理している時に、家の内側から光が刺し込む場所を指してくれるように周囲をうろつくジャガーに依頼した男が、ジャガーが家の中に入った頃合を見て扉を閉めて、ジャガーを閉じ込めるのに成功するという英雄譚がある。その話を取り上げて、コーンは、英雄の振る舞いは、二つのものの類似性を認識し、差異を比較して達成される「二重記述」（ベイトソン）に似たもので、ある瞬間に、より高位の観点が生起して、二つのものがつながれる点で、シャーマニズム的なものでもであると述べる。発表後の観点やパースペクティヴをめぐる議論を通じて、リーフモンキー鳥のパースペクティヴとは、人間とリーフモンキーの両方をつなぐ、より高位の観点として立ち現れる、一つのシャーマニックなパースペクティヴではないかという見方が浮かび上がった。

二番目の伊藤による発表では、チンパンジーにとっての人間／非人間ダイナミクスについて、いくつかの事例をもとに報告をおこなった（常識的にはチンパンジーは人間／非人間の区分においては「非人間」となるのであろうが、ここでは予めこれらの区分のどちらかにチンパンジーを帰属させるという視点は取らない）。野生チンパンジーは観察者である「人間」に対し、それを道具（ただしディスプレイとして「有効な」道具）のように突撃誇示のディスプレイに利用する場合もあれば、同じ集団の他個体とするように「人間」に対してくすぐるなどの遊びをしかけることもある。過去に医学実験のために狭い檻に10年以上にわたって幽閉されていたチンパンジーにとって、そこにいる「人間」は長い年月の中で働きかけへの応答を欠いた存在としてある。しかし、こうした経験を経てなお、それ以前に手話で会話をしていた「人間」とは、10年以上の別離の後にもその出会いの瞬間から探索的働きかけ（会話）を即座に再会する（ファウツ&ミルズ 2000）。つまり、チンパンジーにとって「人間」は単なる

カテゴリーとしてではなく、探索的な働きかけとその反復に応じてさまざまに境界づけられる。同様のインタラクションのダイナミクスは、野生チンパンジーが関わるさまざまな環境の事象（例えば、Zamma 2002, 2011; Nakamura 2009, 2013）との間や、同じ集団のメンバー間でも見られる。生き物が複雑で多様で、そして変わり続ける社会・生態環境を生きていくとき、食物／非食物、捕食者／非捕食者、同集団／非同集団といった区別はその生き物の生存にとっても重要である。一方で、アカンボウ時から働きかけられることや働きかけることを極端に制限されたチンパンジーが、外界への興味を失いひたすら常同行動を繰り返すようになる（ファウツ&ミルズ 2000）といったことなどを考え合わせると、区分を固定せずにそうではない可能性に開かれてある（探索的である）こともまた生きていくことに必須の要件であるといえる。「人間」にとってのカテゴリーとしての「非人間」もまた「人間」を含むさまざまな環境の事象と探索的に関わり、その関わりに応じて人間／非人間のダイナミクスを具体的に作り出すのであり、その意味で「人間」だけが人間／非人間のダイナミクスと特権的に関わっているとはいえないのではないだろうか。

#### 【参考文献】

- ファウツ R, ミルズ ST (高崎浩幸・和美訳) 2000. 『限りなく人類に近い隣人が教えてくれたこと』角川書店.
- Nakamura M 2009. Aesthete in the forest? A female chimpanzee at Mahale collected and carried guineafowl feathers. *Pan Africa News* 16:17-19.
- Nakamura M 2013. A juvenile chimpanzee played with a live moth. *Pan Africa News* 20:22-24.
- Zamma K 2002. A chimpanzee trifling with a squirrel: Pleasure derived from teasing? *Pan Africa News* 9(1):9-11.
- Zamma K 2011. Responses of chimpanzees to a python. *Pan Africa News* 18: 13-15.

三番目の報告者の大村による発表の概要は下記の通りである。

この発表では、①人類学の在来知 (Indigenous Knowledge) 研究において認識論から存在論に議論が移り変わってきた経緯について学史的な整理を行い、②「イヌイトの知識」と呼ばれるカナダ・イヌイトの在来知を事例に存在論の問題点を検討することで、現在の在来知研究における問題の所在を明らかにし、③今後の在来知研究ではオントロジーよりもコスメティックに焦点をあてる必要があることを示した。

#### 1 在来知研究における認識論から存在論への道筋：固定的な知識から知識制作のダイナミクスへ

古くはレヴィ=ブリュルからはじまって、レヴィ=ストロース、グディ、タンバイア、ラトゥールなど、人類学においては、近代科学と在来知の違いと共通性の検討が重要な主題

の一つとなってきた。人類に共通の心的な基盤からさまざまな知のシステムがいかに分岐して生じるのかのかが探究されてきたのである。とくに 1980 年代になると野生生物の管理や環境開発計画をめぐって、さらに 1990 年代後半以後になると地球温暖化をはじめとする地球環境問題をめぐって、そうした環境問題に対処する現場で近代科学と在来知の両方を活かす必要性から、さまざまな在来知と近代科学を比較する研究がすすんだ。そのなかで、近代科学と在来知を世界認識のパラダイムとしてとらえ、そのパラダイムを文化の違いによって説明しようとする認識論的な研究が、近代科学と在来知が対照的な知識体系として分岐する過程の背後にある政治・経済・社会的な力関係を見逃してきたとして批判されるようになっていった。そして、2000 年代以後、在来知研究は STS（科学技術研究）と合流しながら、さまざまな在来知と近代科学を多様な世界生成の実践としてとらえなおす存在論的な研究へと大きく舵を切り、今日にいたっている。

こうした在来知の存在論的な研究には次のような特徴がある。

- (1) 固定的なパラダイムから知識制作のダイナミクスへ：対象社会の存在論をその真偽を問わずに記述する初期ボアジアンをはじめ、対象社会の存在論を文化によって文化相対主義的に説明しようとする認識人類学や「文化とパーソナリティ」論とは異なり、在来知が成立するため条件として人々が世界を知ると同時に制作する実践が注目され、その実践のなかで存在論（世界がいかに存在するのか：知識それ自体）と認識論（世界はいかに知られるのか：知識制作の物理的手段）がいかに立ち上がりつつ変わってゆくのか問われる。また、そうした存在論と認識論が弁証法的関係を切り結ぶ人々の実践のなかで、「自然＝社会」としての世界が実在としていかに組織化されて変わってゆくのか問われる。
- (2) 実践への注目：在来知と近代科学を固定的で一枚岩的なパラダイムとしてとらえるのではなく、人々の実践のなかで立ち上がってくるちぐはぐで多様なリアリティが様々な手法でつなぎ合わせられることで、一見すると安定した総体に見えるシステムが再生産されたり変化したりするマイクロな過程に注目する。
- (3) 「自然＝社会・文化」の総体論：自然と社会・文化を切り離して扱わず、人間と非人間（モノ）のハイブリッドなネットワークもしくはシステムとして近代科学と在来知をとらえなおす。
- (4) 観念論と唯物論の統合：観念のシステム（上部構造）と生産システム（下部構造）が相互に相互を構成し合う弁証法的関係のなかで人々が観念と実在からなる世界を生成するダイナミクスに注目する。
- (4) 多数多様世界（multiple worlds）という考え方：「自然／社会・文化」の二元論に基づく「社会・文化相対主義」（たった一つの自然にたくさんの諸社会・文化）から「自然＝社会・文化相対主義」（たくさんの自然＝社会・文化）への移行。
- (5) 在来知と近代科学の対称的な扱い：在来知と近代科学を「自然＝社会・文化」としての世界を制作する実践としてとらえなおし、両者を対称的に扱う。

- (6) 接続可能な存在論的相対主義：それぞれの世界は存在論的に相対的であるという前提にたつが、文化相対主義とは異なり、共約可能な公分母がなくてもプラグマティックな実践によってそれらの世界は相互に自律しつつ接続可能であると考え、その接続のあり方に注目する。

## 2 在来知研究における存在論の問題点：イヌイトの在来知の検討から

こうした存在論的な視座からイヌイトの在来知を検討することで、存在論的な視座から在来知を研究する際の問題点について検討し、今後の在来知研究の課題を提示した。

- (1) 在来知の場合も近代科学の場合も、存在論は目指すべき世界のあり方を示す指針として、世界を制作するためのシステムやネットワークのなかで機能しており、「対象の本質とはなにか」というものそれ自体の奥底の性質ではなく、「自己と対象がどのように振る舞い合うべきか」という自己と対象の表面的な相互行為を律するものとしてとらえなおされる必要がある。
- (2) したがって、在来知と近代科学のどちらで生産される知識も、その知識生産を通してそれぞれに制作されてゆく実在の世界も、世界それ自体や対象それ自体など、世界や対象の本質にかかわるのではなく、あくまでも世界や対象の表層にかかわるのであり、その真偽ではなく、それぞれのネットワークやシステムによる世界生成に有効か否かで、その妥当性が判断されねばならない。

## 3 オントロギーからコスメティックへ：在来知と近代科学を対称的に扱うために（序論）

以上の考察に基づいて、在来知と近代科学を対称的に扱うために、これからの在来知研究は次の課題に取り組むべきではないかという提言を行った。

- (1) 在来知と近代科学のどちらの場合でも、存在論もその存在論を指針に実践される世界生成も、世界や対象そのものの本質にかかわるのではなく、自己と世界や対象との関係という世界や対象の表層にかかわるのであれば、存在論も世界制作も世界の表層にかかわる問題、すなわち、ドゥルーズとガタリに基づくプレヴオーのことは借りて言えば、「コスミック・コスメティック」あるいは「装いのコスモロジー」として考える必要がある。つまり、自らとものの振る舞いの「抽象化＝脱人称化＝脱有機化＝様式化」を通して、すなわち、自らとものの振る舞いをコーディネートする「コスミック・コスメティック」を通して自己と世界を生成変化することとして、存在論に導かれる世界制作の実践を扱わねばならない。
- (2) このように存在論と世界制作の問題を世界の表層の化粧術の問題として扱うに際しては、メイヤスの「減算」のアイデアが参考になるかもしれない。すなわち、私たちの理解を超えた過剰な「イマージュの流動」で溢れている宇宙のごくごく一部分を操作して宇宙の表面に化粧をする実践として、世界を知ると同時に制作する実践をとらえなおすことが有効ではないだろうか。

最後の報告者の岩谷は、今後の研究の展開に向けて下記のような報告を実施した。従来

インドでゴミを扱う清掃業は低カーストが従事し、社会的価値が低い生業であったが、廃品回収ビジネスは利潤も大きく、新規参入が相次ぐ産業となっている。とりわけ、インドの金属リサイクル業界の成長率は著しく、インドは世界第3位のスクラップ輸入国でもある。本報告では、北西インド、アフマダーバードの露天商が回収し売買するスクラップ（bhanga）と古道具（antique）を例に、（1）インドにおける廃棄物とリサイクル業の現在、（2）廃棄物をめぐる人々のネットワーク、（3）廃棄物のルート、について明らかにした。さらに本報告では廃棄物という概念を再検討し、廃棄物が循環することによってもたらされる異なる地域や階層の結びつきや、廃棄物をもつ新たな価値創造の次元について考察した。本報告では、ものの生産と消費の狭間で生じる廃棄物を単なる環境への負荷や余剰、あるいは再生可能な「よきもの」としてとらえる視点ではなく、廃棄物が露天商やスクラップ業者によって媒介されることで新たな資源のフローを喚起し、社会の再分配を実現している側面に焦点を当てた。

以上。